

《詫は今や眼を閉じ、耳を塞ぎ、手入の禦官を退けめ。」

しかししながら判断するために、つまり、すべての至上権に基づいて決定する配慮たけを精神に委ねるために、哲学者は必ず注視すべきではなく、その光景から視線を転じなければならぬ。

が人體場に過ぎなかつた。ややのうなつて、精神のうちに宿る彼の判断力が、それは眞の人間であると彼に告げられた。彼の精神は至高である。したがつて彼の眼が、單に单に彼を許すもので、精神は、眞実と考えることを信する。

を偽なるものから区別しようとして当惑する。彼は窓から眺め、部屋の静か内部から外の状景を注視し、人々が街路を行くのを見

半開の扇子の中に、而して理解している。『世界とその喧嘩学者デカルトは彼の部屋の静けさの中にいて、世間とその喧嘩から離れて分析し、解剖し、検査し、省察する。また真なるもの

卷之三十一

私は、それほどほんへん問題であると判断してい。じのように私は、眼で見て、思つて、いたがゆうで、私の精神のうちにある

し私がその窓から見るのは、帽子と着物だけではない。その下には、幽か、自動機械が隠されているよりも、あり得るはない。けれど

（もし私がまた、また、窓から、街路を通っている人々を眺め、たとす
より、（……）私は習慣に従って人間そのものを見ると言う。しかし

加藤登之男訣

マク・リシ

自投

も、視る者の体験内部であるすべりての可能的印象の地平である。自身において視られたる空間であり、対象の決定可能性であるとしたのである。完全所与とはされ自分で視えないにしても、それがものである。完全所与とは同一者なり、無限に決定可能なだ。完全所与とは事物と同一者なり、無限に果してなく異なるのである。言いかえれば、事物の完全所与といふのは、規整的理念であるかぎり予め規定されており、現実的印象の窓の外部における射影の時間的連續を調整する、あるロゴスである。意味での理念であり、対象の射影の時間的連続を調整する、カトイ的把握——いわゆる現出のある『型』を対象に附与するカトイ的意象である。世界の諸対象の十全な知覚——厳密な意味での眞の把握である。しかしこれがその責めを負つていては、原理的に不可能であるのが、しかしこれがその責めを負つていては、原理覚は統攝 (Apperzeption) である。つまりは眞の把握の初期であるから事物についての印象として印象を統一することは、原理される、印象の把握が行なはれるのだ。チャーチが言つては、知覚は統攝作用の生けむる現象の中にあるとする形で呈示のない。つまり思念によって統一されるが、それは眞の把握 (Wahrnehmung) といふ。内世界的事物についての眞の把握 (Wahrnehmung) といふこと、事物の印象として統一されるが、もう少し詳しくを知していふとともに他の面を視る」とか可能であり、すべての感覚的印象が同一ことを承知していく。したがつて視る者は、事物の唯一の面を視

志向性には、チャートによっては一體何であるか。視る者が事物から受け取るのは非空間的印象だけであるが、しかしそれが視る者は決して事物のなかでないものに位置していいる事物なのである。これは、たゞ現象の中のやうに見て置いてある事物なのである。また事物をすべて入れての面から強調されなければならないが、それも無限で寸止められない。しかし私が強調する點は、現在の事物と等価ではないであらう。しかし私が強調する點は、現在の事物と等価ではないであらう。しかし私が強調する點は、現在の事物と等価ではないであらう。

想像している人ひと——のいじはなしておいて、絶対的観点を見出す確実性のうらにすへてを解明し、他の人ひと——彼が認為、またはるようになれば、彼の部屋を離れなくとも世界を再構成し、完全なる形で現れる。世界が在り、事物が暗い部屋の外に恒存しつづけるには、志、向、性的緊張が必要なのである。哲学者が志向性を理解するうであらう。世界が在り、事物が暗い部屋の外に恒存しつづけるに、それも生々とさせある生がなかつたならば、無となつてしまふ者に触れていてゐるのである。したがつて世界は、もしも視る者のうちのであり、影の流れを残していく感覚的印象の媒介によつてだけ視していへば注視する哲学者にとって、世界は、窓から覗かれていて、反転である。いのちうなふうに象徴された視る者の生が進行してはじめてき、事物の單なる要素である。それはある夥である。

——して、その志向性の謎に対する意識が、向むかはるが、——のうへと観る者たる者は愚直じきじきである。それは哲学者によって象徴されられる概念者であり、言いかえれば、既に哲学者であるとして見られる者たる者は彼の部屋は言わばある暗い部屋であるが、事物については、時間の車輪で引きひき拉れて繰り広げられる彼の体験のフーリュの上にて、ただある印象を受けておるだけである。——の印象（感覺の素的所）には、空間を形成する次元が欠けていて。印象は奥ゆきをもたない一種の純粹體であり、視る者の意識が、感覺の乾板の上に受け止む。

知覚に於けるカーネギーの説は次の如くな。素描によって「知ら
れども事物に於て、視る者はたゞあぶ離（Abstrattung）
されどもかくして見るが、その周囲を廻り、眼を開け、その射影
が變つて、視る者が知覚してゐる所常に同じ事物であるの
だ。同じ事物が空間のある位置に置かれていてのみにして、射
影は非空間的である。つまり射影は体験の秩序に屬するものであ
り、感覚の素材的所与》である。この場合、ラ・スクは、非空間的射
影の流れが視者の現在の体験の流れでありながら、空間的事物の
知覚を生み出すとして、引き出していくのである。それは全く志向性
の譲りあり、その意味解釈するとして、哲学者——現象学者

デカルト主義と、フッサールに至る意識の近代哲学との軌跡は、「省察中の哲学者」と題されたラ・ブランの状景の中にあ。彼は、哲学者は、弱い斜光だけが入って、眼を伏せ、思念で一杯になつた額を垂れる。だから視線をそらし、眼を伏せ、思念で一杯になつた額を垂れる。世界は外部にある見えない。部屋の左隅にいる彼のところから奇妙な廻り階段が闊たつひき、そこから、落着かない人物がもの陰かに現景に、親愛の情をこめた女中が灯をかべているのだ。哲学者はしたがつて光りが入ってくると、一瞬毎暗くなつてへりへり廻り階段との間に坐つていて。しかし彼は坐つたりふげなくて、わかれわれは別の部屋におり、から、しづらへは見定めうがな。われわれは別の部屋におりながら、自らを思ひする。それは外部から斜めに入つてくる光りのおかげであり、神が真理の保証人である。

そこには表象の枠ぐみが、その先天的相関者である反省性とともに打ち固められている。しかも長きに亘つてある。フッサールの理解するところへ、哲学者が今お根本的に身をおいていところに打ち固められている。しかも長きに亘つてある。フッサールの

哲学者の銳い先端の外へ——思ふ、作用の現実の外へ——躍躍するところを基礎とするものだ。事物と世界との存在についての根源的信念(Urdoxa)なのである。世界の統攝は、世界の存在についての根源的信念(Wellthesis)である。確信者たる世界論攝は、マルクスの「アーチの場合」(Arch)である。しかし、かく、終局的には神の業によって保証される精神の至高性を自由に行使したのに対して、チャーチには、その脳の働きが生むる結果のみがある。だから、チャーチは、超論的意匠としての手放されてはならない。つまりチャーチは、超論的意識の輪から、志向的躍進を禁ずる自身から到來す。だから彼は、自己自身のうちで開じておらず、自己の生の深みで下りていって、自己の光を見出すねばならぬ。だが、その光が彼に階段を昇らせず、闇へ導く螺旋をたどらなければならぬ。しかし、増殖のうらぎが発して最後までは推進されない。しかしながら、それが彼の著作(四万五千頁)の限界である。

内地平から分離するのに由りて、外的地平が不動の大地の内地平に含まれる面があるのみならぬのであり、或は仕方で逆に外的地平(世界の地平)は内地平に關わっており、それがおるのである。それで内地平が世界の事物を欠いた内地平か、内地平にてはあり得ない限り、あるいは世界の事物を含む内地平の内地平の分析を慎重に分析するに必要である。やがてこの多重の含蓄の諸結果を慎重に分析するに必要である。さればまず内地平の地平論の射程を検討し、それが哲学者を窮地に追いやらないかどうかを考察してみる必要がある。

現実のなかでは原理的に認識不可能であるにしても、世界が、無限に探求し決定する、この可能な全体性を構成する理念（カントの意味における）によって開いた世界の地平にじつうのが、在るのべた。この規整的理念は、すべての内世界的事象に現出のある総体的把握を可能にする。したがって、世界がすべての内世界的事物の横たえた統握を基礎づける、世界の統握（Welt-Apperzeption）もまた存在するのである。この展望のなかでは、空間及び時間における対象の配置の問題は、内地平と外地平との間の接合の問題に集約される。弧立した事物についてそのそれでこれの経験は、この事物の各々の印象に可能な未来の諸印象の子期が属する——志向的跳躍のなかで——限り、内地平をもつ。つまり可能的未来の諸印象なるもののみは、この同じ事物の終局的諸決定と、それについてのあらゆる過去の印像をその周囲に寄せ集めるような役割とを果してしまふのみである。しかし、この経験は同じく、根柢者がこの同じ事物から特定である。しかばねの経験は同じく、根柢者がこの同じ事物から特定の印象を受容するとき、この事物と同時に現れる他の、諸事物——背景にすきなかつたのであるが、そじから、事物の可能な経験領域野——が展開する——そもそも予期してゐる限り、外地平をもつ。カントが言つてゐる、この「一次的地平は》一次的地平（内地平）

この明るみたからであり、空間それ自体が諸空間の集合として決して最も分明なのが非空間的場所——(場所性) (Ortschafft)——である。または最近の著作 (例へば『建てる・住む・思はず』) のなかで、この明るみたからなるのである。しかし『存在時間』、『存在運動』、『存在の運動』などに前分析の発点として現れてゐる。そこで、まず第一が『存在の眞理』(Ortschafft des Seins) ——最近の「アーティフカル」が『場所性』(Ortslichkeit)であり、往々の二重運動のなかで存在の眞理的に解釈される。そこで、アーティフカルが一の問題を本質的に解釈学的(?)である。や、ハヤカワが「アーティフカル」表現を解説する公式で、最近の「アーティフカル」が「存在者」が自らを示する明るみにして把握するといふことと暗に含んでおり公式——を發見する現象的(存在的)循環の道筋である。かくの人の精神世界の発展點であつる。じつにひいての『場所性』(Ortslichkeit) ——最近の「アーティフカル」が『存在の眞理』といふ人間的である。つまりは、現象化する。それは以後は存在から、つまり無からである。存在自体となつた二重運動からであるからだ。したがつて、不在(虚無)でもなく、現存(古典的意味での存在)でもない、存在(時間)以後に遂行された(有名な)転回 (Kehre) は、解釈学的解明の一重運動が現象化の一重運動(?)に転回するにはかなうにである。

「アーティストが一九一七年のフランスへ完結手紙(?)のかたで、も、薄暗い部屋を明るへゆる力方に運ぶであらう(?)」。

自ら我に近づくか、思慮作用過去と未来との地平を展開する、無限な理念つまりである。自我統一は予期された子のもののみで描画がない。それと並んで、思想作用によって唯一の時間地平を展開する、無限な理念つまりではある。自我統一は予期された子のもののみで描画がない。

つまり、この意味での「アート」にはからならない。現在において自我を複数の地平内以外、超論理的主体の精神な生じておらず、内世論的生じておらず。世界の事物の知覚とともに同じうつた、ヨーロッパ統攝の事実を含む。世界と全く同じうつた、自我は予期されておるのである。

アーティストは、自我は外部に、つまり無限のかなたに、地平に在るのである。自我は、自分で、いふ。自我とはつまり複数者である。

であり、その居住の意識が常識から離れたってのは、住みついていたことがであります。人間の存在——現存在——は依然として居住で読むことによって、いかにから来ていても——次の点で敢えて問題とす
てあるが、——その困難さは疑いもなく、明るみを文字通りに十分困難な思想の細部に立ち入るにとどめ、この論文の問題ではないの
住みついでいる。

人間が脱目的である限り、存在の開空である《*Sein*》の明るみに
存在の真理の秘密の内奥(?)にしがみつへるのである。

もうかたちで露わにならぬ。この露呈のなかで、人間は脱目的
(die *Lichtung des Seins*) であつ。そして人間は、この《*Sein*》であ
りとした最初の哲学者であった。ハイデッガーは、哲学者を完成
した場合を別とすれば(?)、ハイデッガーは、哲学者を完成
した最初の哲学者であった。しかししながらそのための唯一の道、王道はないの
を覚えろ。しかしながらそのための唯一の道、王道はないのを
再び思想で仕上げるのでなく、それを理解するうえで従がれて
られるからである。哲学者は冒険に出発し、ついで世界の喧騒
に目覚め、夢から引かれじづれ、彼の脳髄にてくて跡かれたものを
見ていてもおかしくはない。といつては、哲学者もまた哲学者
がひとびと空虚となれば、哲学者ももや自己を、絶対的な根柢

だらうから、それはそれでよい。だが世界の自然的措定を還元しない或る事、実の上に立往生しゆくけるであらう。そして彼は次の
この措定を基礎づけている深い生きを露呈するためのあらゆる努力に
拘わらず、彼は何時も、いわば内世界的事実の相関者にはからら
ない或る事、実の上に立往生しゆくけるであらう。そして彼は次の

開空なである。

メルロ＝ポルテは、自分を完遂するにによって無限といふ理、念を消す。やの第一の結果は——やがてわからむに、めぐらしく體の一進の転倒を伴つてにならひたが——それ以後或見るか、かゝる見えみの存在が、常に或る思えみの存在(VI, 274)。知覚が眞に本物のものだとし、常に或る思えみの存在すばらうである。

れた密室を内に含む表面であるから、現在隠されている面を覗いたるためには、やがてひじりかかりやすくなるから、現在隠されている面を覗いたる間に偏風す。時間に偏風すといはせり、現在の連續的流れの無限に偏風す。時間に偏風すといはせり、現在の連續的流れの無限に偏風す。

理的見えていたりのじつじつとあります。彼にことて事物ことは、集中觀される。チャーチルにとって、他者の統握の場合を除いては、原則として無實際に赤実するといふのであるが、定式化した形式として直ぐが、統握のなかでは、空虚であってその他の見える可能性のあるものもつてゐる。それは生ける現在のなかではじめじめ見ええないのだけが、統握のなかでは、空虚であるといふのである。それで、その周囲で固められた或る事物の側面、または表面としたけ意味を中心とする、世界の開拓である——》(VI, 305)。

「われわれの精神は窓をもたない。」(VII, 276)。世界のうちは、在るが、見なじみのとくに、別の見えぬものとの関係である。それらの關係は見えるものに見えぬもの(離在)との關係である。とか、單に不在であるよりは或る實在的なものではない。それは原理上の隠蔽性、なものである。つまり見え、るものの中を見ぬ、ものであります。周界の開全性であつて無限性ではないのである。——無限性は根源的には即、自であり、客体なのだ。——私にとって問題となり得る世界存在の無限性とは、機能して、戦闘的な有限性、つまり

存在の諸崩壊

——おおむねの宇宙論のおかげなのが、——の手写しを余儀なく
いたゞか——の《存在論》のかたに或る伝統的余として現れるもの
は、必ずしもこの宇宙論は、後に謎が解かれるべく、
田舎町令金命のものである。ひいては、後で現象化されての
が、現象化の宇宙論(?)にて云々とテイテイの表現によると
のでない野生的世界のうちには、じつじつとじきを含意して
いたがって暫回の完成は、メルヘンホーローの表現による
のではなれば現するところにねぞれを表現するとして、人間の造りたるもの
人間が出現するところにねぞれを表現するとして、人間の造りたるもの
人間の現象化の問題が、子めは人間が住みついておらず、ひとたび
転回しなで送り出していく、無かららの現象化を含意すむとしていた
。

海は、また、山、木、花などではあるのだが、最も確実なわれわれの思想と船底とを動搖させるものの構築物、最も確実なわれわれの思想と船底とを動搖させるものである。われわれも乗越えてわれわれが航行するものは海上である。われわれも乗越えてわれわれが航らざりだら、風や舟の傾斜をしめてるものからであつて、まことにしら悪うだら、前に始まりの日にあらがいの自然であり、われわれのすへてが出現してへるものからであつて、まことにしら悪うだら、風や舟の間で住みついてゐる無人の自然である。以前の日でなく、常に者いそは未開のものであり、野性のものであり、人間に潜伏し、人間を終着点として人間のうちに锚を下してしまふ。まことに他の人間を蚕食し、人間のうちに隠れると同時に人間を必要とし、これが自身のうちに人間とは別なものを持ち、それが自身のうちに隠

完成した形での古典的思想のなかでは——志向性に関するフックサ
ーの教義のなかでは——事物の中心はその周囲とともに与えられ

諸地平、肉

は、諸《存在》がもや世界の眼として抗してその富を護る階層ではな
く、無であるにじてとぞ含意してみ。そしてその無れ、じてお
る毎に爆発しながら凹みとなり、繰り抜がりながら巻きしつき、自己
と接触するじゆに安定し、その安定するじゆに、外観自体として
現象化する自己の結縁組織を見出すものである(1)。外観のみ
はや、即自動的に完全であつて現実的には見えない或る事物の可視的
な面ではなべ、自ら深へべられ、侵蝕されながらあらむ。じゆに
地層の隆起と浸蝕との一重作用の結果として生ずる崩壊にはからら
ないのと同じである。外観は、その背後で真的実在を離すじゆに
よつて歪められた表面は、永久に不完全であり、永久に誤りであり
か、実在そのものにはかられない。しかしづと無相互の間の接觸に
つて、擬似実在である——と言つのは、歪みはシリシヤ語で擬似
(Pseudos)と言われてゐるからだ(19)。外観は存在の崩壊であり、
真理の崩壊である。現象化との関連、つまり無の外観を持つことと
の関連では、真理は「一次的結果」過ぎない。それは歪みから生ず
る、或る歪み(une distortion de la distortion)であり、未完結なもの
の完結であつて、その完結の状態も、より高次の段階では謬のよ
うになつてはしまつたのである。

十三述しておいたが如く、アトロ=ホーテルがたゞじゆのアリの道程である。彼によれば、見えぬもののは原理上見えぬものであつて、見えるものだけ見て見ぬものではある。だから見えぬもののは根源的に見えないものにしておいたが如くして、即ち根源的に表示不可能なもの、非一存在の湖として呈示される。それは「場所的」、時間的、開、空のなかに埋没されてゐる、或る種の虚無》(VI, 254)であつて、《因みに其あるが穴で述べたが如く、或る《質的》に限定された非一存在は、或いは質 (quale) である。」(VI, 234) がの如きである。

一重性が実際に諸形式の自己完結、集中領域における譜形式の構成問題に拘って、その見かけで充分である。ナショナリ主義の終局的根拠が、集中領域から構成された宇宙論である。と、西洋哲学の眞の祖先——ハイデggerまでをいに含まれて——はハイデggerである。かつて懲罰された反逆の罪は今なお成就しつづけてゐる。そしてひやに、奥ゆきの意見は必然的に、その『存在論的規則』が少くとも存在の規則と事柄であるところの非—存在から、見えるのが分かるか、入り込めるかでわかる。じぶんが知られるのはその点と、そしてひやに、奥ゆきの意見は必然的に、その『存在論的規則』が少くとも存在の規則と事柄であるところの非—存在から、見えるのが分かるか、入り込めるかでわかる。

1) の強調しが重なる場合に使用され、奥ゆかしい事物の表面、または邊縁に近い關係で、或は底の弱たる——とて、或は強烈な色彩が重なる場合に使用され、実は墨色の筆触が先に示すからであるが、確かに両者の重複の結果の特徴を呈する點である。兩者に異なり、兩者その他の領域を其離しむるのみのものである。たゞ、前者は物理的的であるが、後者は精神的であるのである。この二つの間には、兩者の間の説明し難い差異がある。

。諸外觀が即自的事物の表相的判断片として構成されるのは、事物の表面を中心としたものである。この表面的知識は即自的事物の外觀である。感性的外觀は、存在する、唯一のものである(即自的實在)との関連において始めて意味をもつ、一種の下位實在(sous-réalité)——現在の幻影——に過ぎないものに対して、即自的事物は唯一の眞なる実在である。観察され自身では、それが何であり、それが何でなければ決定するには何よりも簡単である。つまり、それを決定するためには精神の眼が必要とするのである。他の外觀が謂つていても言ふべきが、やの外觀が如何なる中心にめぐらしくしてゐるか、それが何であるかを決定するには何よりも簡単である。

の本質(即目的事物と感性的外観)から再構成の單なる結果なる
諸事物の奥底がその縁辺から遙かに離れてゐるのは、一一〇集在
るのなかに、その哲學がまだ本格的に問題としていたいとする
ところは、その模擬が最も敏かに、その哲学の才で問題を構成して
しまった世界の意味の源泉が世界以外にいよいよ有り得る筈のもの
へ、世界自体のうらみからである。哲学、つまり問いか存在す
れば、それは或る人々が、一重視を生ぜしめる奇妙な陶酔感
の犠牲となるからなのではないが、哲学固有の問い合わせ、つまり
のが世界自体であらかるかのうがあり、その謎が世界のうちから離
れているかのうである——これが、つまり錯誤を身に附かれてゐる
人間といふ奇なる存在によって、世界に附加されるからなのでは
ない。

奥ゆきを問題とする以上は、古典的思潮⁽²⁾の空間根柢から覆えに十分であり、メルロ＝ポゾン⁽³⁾の全著作が連接されるのも、

り、その刺し繻いを補たむのは世界の実体そのもので、古典的模倣の根柢について言つねば、それは至みやれ自身の名づけられたへ、世界の肉である。

は、「すこしての結晶がある点では、鑄眞物である」（VI, 267）。同様に見えるものにして成り立つのである（VI, 267）。同故ならば、「視覚は結晶不可能なるもの、結晶化である」（VI, 327, 圖示筆者）からであり、「感性的世界のいわゆる實在性なるもの等……神話化して外觀の至みは實際それ自体で、蚕食から成る結晶不可能性、内部が外部によつてと外部が内部によつてとの绝对的被覆、内的地平と外的地平との相互交疊（chiasme）〔頭註〕を表現し、これらに、可視的位置を占める位置を占めていて表面——それは限界のないもの、位置を占め難いもの、つまり見えないものの『限界』なのである——の構成を表現していくのである。この場合、謎は次の通りが近似である。それでは限界のないもの、位置を占め難いものの『限界』が、そこにあつて無を自己と接觸するより引き寄せながら、結晶組織が、そこにあると呈示の歪みは、結晶組織（世界の肉）の皮膚にしたがつて無を自己と接觸する外觀でのものであるといふことである。そしてやはり結晶組織が構成されるのは、自身と同じだ、それら固有の方性で定立され、自身と自身との凝集，《愛》を通じておける同一性力動的

外観内部の歪みとともに、地平概念の意味は根本的に変つてゐる。地平は「天空や大地」と同じへ、さもと片づいた諸事物の集合ではなく、意識の潜勢性》(VI, 195)——知られてゐるヒーリング、サーガなどではそういうものはない。それによりうの「経験的で存在的な現実に見えるものは、一層の折りたたみとか、重複とか、または詰め物を入れた刺し縫いにようつて、或る可視性、或る可能性、その原理、あり、「思想」固有の持がめのはなくしてその条件であるを提示するからである。この可能性は現実的なもの、藝術的ではなくて、類似物をつくり譲渡したりするに至ることでのきない全體的様式としての、或る暗示的、省略的様式である。その可能性はまた内的一地平と、外的、地平と、あり、現実に見えるものは、その両者の中の後者、つまりたまれば、重複しながら誘なう内部にあると全く同じく、外の仕切りなりの、が、兩者は、他の見えてるものにだけ無限に広がつて、地平部に、現実に見えるものの外的、地平にもある。もし外的、地平が「誰でもが認識する」地平であり、内的、地平が「司想性の詠め」された圖

ある見るもののみが非-存在である。したがって非-存在は性質、堅い皮のなかで、それを空虚に響かせらるまでも、奥底を顯わにする感覚である。しかしに奥底本体は、或る面とか台とかねぐら、周界であり、外部であり、世界そのものである。世界には必ずする感覚である。しかしに奥底本体は、或る面とか台とかねぐら、周界そのものである。しかしに奥底から現れるとすれば、それは外観が、正しくものを所に外観が自分から現れるとすれば、それは外観が、正しくものを見るため距離をとるアプローチのなかに現象化するといふことである。だからもし外観が平面描写とは別のものであり、離れた或場所に外観が自分から現れるとすれば、それは外観が、正しくものを見えないものに埋没しきなければ、その奥底から到來するといふことである。しかしに外観の皮膚のなかには、それの距離から感らる近接性を持つり出す感覚があるのだといふことである。

外観はその匂いがみたいと、その不完全さ、ひはりあらゆる面で外部に開かれている崩壊であり、歪んだ表面であり、内部と外部とが相互に覆い合はう場合であるといふその事実だけにて、内世界的組織の或る場所に接ぎ合はれていく。奥底といふのが、あるが、あるいは、外觀のかに歪みがあるからであり、メロ=ボンテイが述べてゐるに、見やるものが、『常に開いていた外的平と内的地平との間の一縫の狭路』(VI, 175, 圖點畫書)であるからなのだ。

〔1〕投票（Defenestration）。一六一八年に、独裁者として嫌われたフーラーの代官アルテミシオ・ラヴァラティと、新教徒達によってブリタニアの姫君から投げ出された故事に由来する。その意味で、脱自由の意味をも含めて投票と訓じてみた。筆者がこの語を論文の中心概念に選んだ意図には次の点にあると思われる。読者としての自抜は、思念の部屋に閉じこもって世間を漠然と見ているのではない。歷史的現実世界に跟りて実際に住みついているのである。

訳注

- (22) 同じく一九五九年五月のノート参照、M、二二八頁。

(23) 『知覚の現象学』から、彼の最後の著作『異次元の眞面目な世界』では、それは無に潜在的奇點足(つまり個的的個的的潜在的奇點足)である。それが気が覺世界の中に現れるときには見えてくるのである。これが気が覺世界の背後に隠されているのである。彼は一九六〇年一二月のノートで次のふうに述べてゐる。『彼が気が覺世界の背後に隠されているのである』。

(24) 『知覚の現象学』から、彼の最後の著作『異次元の眞面目な世界』では、アービング・M・ローランが勝手をされたレルネ(即ち)の中心で明らかに充分に明示した通りには決してあって、メルロ・ポリテークニクは、彼の著書『(一九六四)の中でも題には決して、M・ローランが勝手をされたレルネ(即ち)の中心で明らかに充分に明示した通りには決してあって、メルロ・ポリテークニクは、彼の著書『(一九六四)の中でも

(22) 理の各章、ならびに『遺稿』中で公判された「證」(一九六七)九六頁

(23) 「眞理の本質』中の「謬誤」としての非真理論「誤り」としての非—眞理

(24) 「眞理を私たる私たる私の論文を参照、三頁一一四頁。

(25) テクヌス第一一七号(一九七〇)中の『壽』につけての批評

(26) 『テクヌス第一一七号(一九七一)』中で公判された「證」(一九六八)九六頁

(27) 『眞理を私たる私の論文を参照、三頁一一四頁。

(28) 「眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(29) 「眞理を私たる私の論文を参照、三頁一一四頁。

(30) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(31) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(32) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(33) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(34) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(35) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(36) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(37) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(38) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(39) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(40) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(41) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(42) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(43) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(44) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(45) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(46) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(47) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(48) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(49) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

(50) 『眞理の本質』(一九六六)九六頁。

- (1) デカルト、笛卡尔。『幾何学の起源に関する序説』(ラ・リ・エ・エ・ピ・メテー著書)一九二二、一四七頁—一五五頁。

(2) デカルト、省察三の冒頭。

(3) ひの金谷につけられては、丁・テ・ダリの次の書中の注目に値する詳参照。『幾何学の起源に関する序説』(ラ・リ・エ・エ・ピ・メテー著書)一九六二、一四七頁—一五五頁。

(4) フィッキー、『経験と判断』一九六四、一二七頁。

(5) 『経験と判断』二二八頁。園点筆者。ひの金谷についてひの同書二六頁。

(6) 『形式論理学と超越論的論理学』S・エ・マーラー著、一九六五、一三六頁參照。

(7) 一九一七年に両哲学者は協同で、『ブリタニカ百科辞典』に予定された「現象学」の項目を編集した。これがハイデッガーにとって、フルサルト宛てに教訓的な手紙を書く機会となつた。その手紙はフリードリッヒ・ヘルツベルク著の『現象学』の道すがら』一九五九、一一〇頁—一五五頁を参照。

(8) <ケーベル哲学は、理、性的概念に対する全く新しい意味を見出しているので、比尙では立入らねえ。』

(9) 『ヒュームはスベで闘争する手紙』R・ムーア訳、一九六四、六〇頁。

(10) 同上書、九六頁—九七頁。

(11) 『ヒュームはスベで闘争する手紙』R・ムーア訳、一九六四、六〇頁—一六一頁。